

清水の観音さまと曹洞宗

駒沢女子大学学長 東 隆 眞

いたるところに観音さまの霊場

東京に浅草寺（浅草の観音さま）があれば、西に清水寺（清水の観音さま）がある。東に坂東三十三か所、秩父三十四か所の観音霊場があれば、西に西国三十三か所の観音霊場がある。わが国には、いたるところに観音さまの霊場がある。

いま、秘仏十一面千手観世音菩薩を奉安する京都、東山三六峰のうち、音羽山清水寺と曹洞宗とのえにしは、永く、深いのである。

曹洞宗の高祖・道元禪師（一一〇〇—一二五三。大本山永平寺開山）は、京都に生まれ、京都で示寂した。道元には、清水寺に関してしるすところはないが、郷里の代表的名刹・清水寺に、その生涯で一度も杖を曳くことがなかった

とは、とうてい考えられないであろう。中国留学からの帰路、船が暴風で荒れたので、道元が観音経を誦すると、観音さまが蓮華に乗って海上に浮かび、波風がおさまった。「一葉観音」の伝承があり、代表的撰述『正法眼蔵』九五巻のうちに「観音」の巻があり、永平寺の法堂の本尊は聖観世音菩薩である。

祖母と母

観音信仰で育った瑩山

曹洞宗の太祖・瑩山禪師（一二六八—一三二五・大本山總持寺開山・洞谷山永光寺開山）は、観音さまの申し子である。

瑩山の母（のちに懷観大姉という）は、三十七歳のとき、越前・多禰（福井県武生市と丸岡町の両説がある）の観音堂に日参して、毎日三三三三拝の礼拝をつとめて安産を祈念し、境内を歩行中に、にわかにな産気づいて生まれたのが

瑩山である。七カ月であった。三十七歳の高齡出産は、医学技術の進んだ今日ならばともかく、およそ七百年前のむかしにあっては、奇跡に近いだろう。以来、母は、ことあるごとに観音さまに祈り、仏法のお役に立ってくれるように願い、瑩山は母が手を合わせるうしろすがたを見て育った。

母の母、すなわち瑩山にとつて祖母は、明智（妙智）優婆夷という。帰朝して京都の建仁寺に仮寓していたころの道元に聞法し、参禅した。瑩山は、この祖母を介して道元とつながるのである。瑩山は、幼少時代、祖母の感化をえた。

明智優婆夷は、そのむかし、七、八年間も行方が不明であった。娘（のちの瑩山の母）は八方手をつくしてさがしたが不明であった。そこで、清水の観音さまにおまいりし、明日は満願という六日めに、路上に小さな十二面観音の頭部を見つけた。これを拾いあげて、もし母の様



十一 面觀音像

沙門 三喜 畫

子がわかれば、この観音像を修補したいと祈ったところ、果たしてその願いは叶えられ、ふたりは再会できたのであった。

祖母、母の熱烈な観音信仰による家庭教育、宗教教育のなかではぐくまれた瑩山は、やがて、能登の羽咋に永光寺を開いた。開基は「平のうちの女」すなわち黙譜祖忍尼といい、瑩山にとつて明智優婆夷の再来であった。永光寺には、もと勝運寺とよぶ観音堂があったらしい。

清水の繁栄ぶり実見

——夢見た瑩山——

放光菩薩に靈驗

永光寺の境内に勝運峯円通院を建てた。円通院は、祖母の追善供養のため、母の女流済度の悲願を実現するための道場であった。円通院の本尊は祖母、母ゆかりのあの十一面観音で、現

存する。身の丈五、六寸のこの小像は、気品があつて優しい。

さらに、瑩山は、能登の櫛比（門前町）に諸嶽山總持寺を開く。もとは、諸岳観音堂と名づける真言系の古寺であつたのを定賢権律師から寄進されたのである。

大本山總持寺に瑩山の真筆という『總持寺中興緣起』（『諸岳観音堂之記』ともいう）が伝わる（重文指定）。

このなかに、門に入つて、諸堂棟を廻顧すれば、並ぶこと清水寺のごとしという一語がある。總持寺とその門風の将来の繁栄を予想したさまを、夢のなかで、瑩山が感得した。これによつてみれば、瑩山は、七堂伽藍のたちならぶ清水の観音さまに参詣の善男善女が絶えることのない繁栄ぶりをすでに実見していたのである。

また、このなかで、瑩山はしるしている。總持寺に山門を建てたい。山門には放光菩薩を奉

安する。放光菩薩とは、僧形の観音さまと地藏さまのことである。この両尊を一体として、放光菩薩とよぶ。妊婦は、この放光菩薩に祈願するがよい。靈験は必ずあらわれる、と。

このくだりに至って、瑩山の母の観音信仰による瑩山出産の始終を想起するのである。

曹洞宗は観音宗のおもむき

ひるがえっておもえば、清水の観音さまには、子安の塔（三重塔）があり、泰産寺があり、産寧坂がある。

伝え聞けば、清水寺開創のまえ、八世紀の前半、聖武天皇、光明皇后が安産を祈願して、孝謙天皇が無事に生まれたことから塔が建てられたという。

いよいよ、えにしの深いものをおぼえる。

道元の仏祖正伝の法は、瑩山およびその門流が、日本で最大の寺院数を擁する曹洞宗として

発展する原動力となった。

瑩山の孫弟子として名高い通幻寂靈（一一三二—一三九一）は、その母が清水の観音さまに祈誓して生まれたという伝承がある。

清水寺の本堂に向かう轟門には、「普門閣」の扁額がかかる。金沢市の古刹、曹洞宗大乘寺第二十六世中興・月舟宗胡（一六一八—一六九六）の書である。堂々として、安定感がある筆蹟で、轟門にふさわしい。月舟は、弟子の卍山道白（一六三六—一七一五）とともに、曹洞宗中興の祖とあがめられている。六十歳を過ぎて、大乘寺を辞し、宇治田原に禅定寺を復興する。月舟は、能書家でもあった。諸方面から揮毫の依頼が殺到したという。

曹洞宗は、毎日、観音経を読み、大悲心陀羅尼を読み、僧堂のうち衆寮には観音さまを安置し、十八日には観音懺法を修行する。さながら観音宗のおもむきなしとはしない。

さて、また、昭和五十八年、涅槃会の二月十五日、百九歳の清水寺貫主大西良慶和上は遷化された。明治、大正、昭和にわたる日本仏教の至宝であり、清水寺の中興の祖である。

葬儀の導師は、ときの大本山永平寺貫首秦慧玉禪師であった。他宗の管長さまの葬儀をつとめるとは、異例中の異例であろう。

瑩山三代と仏縁しるした巨碑が

清水寺内に建立

前後するが、瑩山、その祖母と母の三代と清水の観音さまとの仏縁をしるした石碑が、十一重石塔のもとに建てられた。優雅な重厚感にみちた巨碑である。横浜市、曹洞宗・善光寺の寺族・黒田倫子夫人の発願である。婦人は、太祖とおなじ越前の出身である。十一月十五日、その除幕式が行なわれた。もとより清水寺当局の破格の理解と英断による。

平成十二年は、清水寺秘仏が三十三年に一度のご開帳されたとしてであった。これよりさき、平成六年、清水寺はユネスコの世界遺産に登録された。

平成十二年は、道元生誕八〇〇年、平成十四年は道元七五〇回大遠忌のとしである。このときにあたり、あらためて清水の観音さまとわが曹洞宗との永く深いえにしをふりかえり、新しい建碑の意義をかみしめることは、まさに難値難遇の勝縁というべきであろう。

ゆづま 東 隆眞 りゅうしん 昭和十年、京都府生まれ。同二十八年、阿波（徳島県）の曹洞宗城満寺出家得度し、總持寺僧堂に掛錫。駒澤大学仏教学部禅学科を卒業後同大学院修士課程終了。現在、駒沢女子大学学長、日本文化研究所長。文学博士。著書に『道元小事典』『太祖瑩山禅師』『禅と女性たち』などがある。